

学卒者の余暇意識と余暇行動に関する調査研究 (第二報)

— とくに大企業に勤務するエリート社員を中心に —

東京大学大学院体育学研究室

江 橋 慎 四 郎
池 田 勝
守 能 信 次

本研究は、今日の産業社会の中で重要な位置を占めると同時に、社会における余暇の最も積極的な担い手である大学卒業者の若い社会人を対象に、彼らの余暇生活の内容を調べたものである。そして余暇活動の内容が、年齢、結婚、居住形態、職種、生活時間、経済条件、仕事および生活への満足度とどのような関係を有するものかを分析することを目的としている。

前号の第一報において、調査の目的、方法、分析内容および対象の特性について述べ、結果の分析と考察のうち、1.余暇活動の内容 2.余暇活動実施の一般的傾向 3.対象の基本特性と余暇活動実施率についてふれた。

V. 結果の分析と考察

4. 対象の諸特性と余暇活動との関係性

余暇活動の実施率を基本的特性、生活時間、経済的条件、生活と余暇に関する意識、大学での体育・運動経験のそれぞれの基本的観点を構成する項目ごとに、有意差検定^(注)をおこなった結果を第4表に示す。これによれば、最も多くの活動種目と関連を有しているのは、基本的特性の結婚という条件であり、11の活動と関係している。また、どの活動とも関係をもたない項目は、生活時間の中の、勤務時間・睡眠時間、生活の余暇に関する意識の中の5段階評定尺度の1つである「上司との関係」に対する満足度である。

以下の各節では、この表をもとにして各基本的

観点ごとに考察をおこなっていく。

(1) 基本特性と余暇活動

第5表は基本的特性と各余暇活動の実施率との関連を示すものである。この表は、年齢に関しては、26~30才の年齢階層の側から、結婚に関しては、既婚者の側からみたものである。したがって、(+)印はそれぞれ26~30才、既婚者の方が22~25才、未婚者よりも実施率が高いことを示しており、一方(-)印はその逆の関係を示している。また、居住形態では、㊸は自宅、㊹は寮・寄宿舎、㊺は下宿・アパートにそれぞれ居住する者の活動実施率が他と比較して高い値を示すことを意味し、職種では㊻が事務職、㊼が技術職、㊽が販売・セールス関係の職種であり、同様にこれらの職種に就いている者の実施率が相対的に高いことを示している。

年齢階層別にみると、26才以上は「ゴルフ」と「日曜大工・工作」「碁・将棋」の実施率において、25才以下より高くなっている。

「ゴルフ」を除く、これら「日曜大工・工作」「碁・将棋」の活動は室内でなされるものである。そして、「ボーリング」「映画」「パチンコ」「喫茶店」において低い値を、25才以下に対して示しているが、これらはすべて、商業施設を利用してなされる活動であり、その活動内容の性格いかんは別として、26才以上では、日常的な活

(注) 内的満足度の合計、外的満足度の合計、満足度合計については、これらとそれぞれの活動回数との相関係数を算出して、有意なものを記入した。

第4表 各項目と活

特性		種目	スポーツ的活動				趣味・教養的活動				
			スポーツをする	ボウリング	ドライブ	ゴルフ	読書	絵画 楽器演奏	日曜大工 工作	習いごと	映画
基本特性	年令		※※		※※			※※		※※	
	結婚	※※	※※		※※			※※		※※	
	居住形態	※	※※	※※	※※	※※		※※		※※	
	職種				※※		※※	※※			
生活時間	勤務時間										
	残業										
	睡眠										
	土曜日の勤務				※※						
	休日の過ごし方	※※	※※	※※		※※				※※	
経済的条件	収入	※	※※		※※			※※		※※	
	個人支出		※		※※			※※		※※	
	レジャー費		※※					※※		※※	
生活と余暇に関する意識 (注)	余暇観		※※	※※		※					
	収入とひま										
	内的	会社の将来性		※		※					
		自己の将来性				※※	※※				
		上司との関係									
		同僚との関係				※	※※				
		余暇生活全般	※	※	※			※※			
	外的	生活全般				※	※				
		給料				※					
		仕事の内容						※			
		勤務時間									
		職場の環境		※		※※					※
		職場のレクリエーション施設						※			※※
		食堂・社宅など									※※
内的満足度計					※※					※※(-)	
外的満足度計	※※			※※					※(-)		
満足度全計				※※					※※(-)		
大運動 学での 経験	正課体育の出席										
	正課体育での運動種目数										
	クラブ参加	※※					※				

(注) 1. 内的満足度、外的満足度および満足度全計と余暇活動種目との関係は実数での相関係数による。
 2. 満足度の個々の項目は、指数1および2と、4および5との間の有意差検定である。

動 と の 関 連 表

鑑賞活動			娯乐的活動					その他の余暇活動				関係種目数
音楽会 美術展	スポーツ 観戦	演劇 寄席	マーシャ ン	パチンコ	競輪 競馬	碁 将棋	喫茶店	飲酒 (外での)	知人・友 人の訪問	買物	マスコミ (3時間以上)	
				**		**	**					8
*				*		**	**		*	*		11
				**			*			**		10
								**				4
												0
												0
												0
	**					*	**	**				5
**							**		**			8
				**		**			*	*		9
					*	**	**					7
					*	*	*	*		*		8
*										*		5
*					*							2
												2
												2
												0
			**									3
**												5
	*											3
				*								2
							*					2
						**	*					2
								**				4
				**								3
				**			*			**		4
												2
			*(-)				*(-)	*(-)				6
								*(-)				3
												0
**										*		2
*	*			*								5

動性において劣っているといえよう。

そして、25才以下は、大学を卒業し、中堅幹部に至るまでの過渡的な存在であり、そうした不安定な時期である故に、その最も拙劣な表現として「パチンコ」（25才以下は(+)の関係を有する）のような没我的で、孤独な、時として少々の利益をもたらすゲームが高率を示すのではないだろうか。

この年令階層と諸活動との関連パターンは結婚のそれと非常に類似したものとなっているが、先に対象の特性の項で述べた如く（前号第1図）、25才以下に占める未婚者の比率が90%以上であることが、その理由と考えられる。

年令階層の項で関連のある活動は、結婚においても同じであるが、それらに加えて、「スポーツをする」「音楽会・美術展」「訪問」の実施率において、いずれも未婚者より低くなっている。そして「買物」においてのみ未婚者より高い比率を示している。

※ 総理府の調査でも、既婚者は家庭サービス（買物・日曜大工・家事など）的余暇活動が多くなり、家庭指向のものであることを示している。結局、結婚という生活の変化の結果、余暇活動における活発さや、広がり、つまり活動意欲の減少の現われであるということが出来る。

※ 総理府青少年局「職場におけるレクリエーションの実態に関する調査」 昭42.7 P.88

この現象の原因には、伝統や習慣の中にある余暇活動の展開を制止するような社会的因子、予算施設などの経済的因子、時間などの生活構造の因子が考えられるが、中でも根本となる社会的原因を除去する教育的努力がなされなければならないであろう。

居住形態については、第2図に示す通り、寮・下宿居住者は未婚者、下宿・アパート居住者が既婚者で、それぞれ60%を占めており、諸活動との関連パターンもそれに影響されて類似的なものとなっており、それが居住形態独自の影響による結果とはいいがたい。この場合は、他に資料がない限り、これを居住形態独自の及ぼす活動パターンであるということは危険であり、これ以上の検討はさし控えておこう。

職種に関しては、これも積極的な内容の活動において関連はみられなかったが、「日曜大工・工作」に技術職が他より高い実施率を示し、「ゴルフ」「飲酒」を通じて、販売・セールス関係が高い実施率を示しているのは、逃避的傾向（仕事の内容から）か、或いは交際的性格のものか、の両方が考えられる。

(2) 生活時間特性と余暇活動

生活時間に関して、その代表的なものである勤務時間・残業時間・睡眠時間についての、各活動の実施率への関連性を見たが、それらの多少にかかわらず、実施率に有意な差は認められなかった（第6表）。

第5表 基本的特性と余暇活動との関連性

	スポーツ的活動				趣味・教養的活動				鑑賞活動			娯楽的活動			その他の余暇活動						
	スポーツをする	ボウリング	ドラッグ	ゴルフ	読書	絵画・楽器演奏	日曜大工・工作	習いごと	映画	音楽会・美術展	スポーツ観戦	演劇・寄席	マジシャン	パチンコ	競輪・競馬	碁・将棋	喫茶店	外での飲酒	知人・友人の訪問	買物	マスコミ接触
年令(22~25・26~30才以上の側から見たもの)		(-)		(+)			(+)		(-)				(-)		(+)	(-)					
結婚(未婚者の側から見たもの)	(-)	(-)		(+)			(+)		(-)	(-)			(-)		(+)	(-)			(-)	(+)	
居住形態	①	①④	④	④④	④		④④		①					①			①				④
職種				③⑤			①									①		③			

居住形態：①自宅 ①寮・寄宿舎 ④下宿・アパート
 職種：③事務関係 ①技術関係 ③販売・セールス

このことから考えられることは、日本人にとって余暇が労働時間減少の結果の相対としてはっきりと折出されるところにまで達したにもかかわらず、その時間的拡大が、内容的充実を伴っていない、ということである。量的な余暇は一応、われわれの前に提示されるに至ったが、その質的な転換がなされてはいない。つまり余暇の増大をはっきり認識せず、その余暇を少しでも新しい自己の活動へとふり向ける態勢が全くできていないことを示しているといってもよいだろう。

次に土曜日の勤務状態であるが、国民生活審議会の報告によれば、昭和50年ごろに隔週2日制が実現し、昭和60年には完全週休2日制が実現するとしている。この土曜日の休日化は今後の余暇時間量が大幅に伸びる可能性を示す有力な要因である。したがって、この土曜日という新しい余暇の形態の過ごし方は非常に重要となってくる。

そこで、土曜日の勤務状態が、現在において(1)休日となっている者(隔週休日を含む)、(2)半日勤務の者、(3)平日通りの者の三者の間の余暇活動の違いをみた(第4表中段)。

休日(隔週休日)の者と半日勤務・平日通りの者との間でみると、休日の者は、「スポーツ」活動において(-)を示しており、逆に喫茶店において(+)を示している。つまり、余暇を多くもっていると考えられる者が、より少ない余暇しかもっていない者に対して、「スポーツ」活動を実施する比

率が低いのであり、また「喫茶店」へいく比率が高くなっている。

同じく、土曜日が休日の者と、土曜日が平日通りの者との間では、「スポーツ」には有意差は認められなかったが、「ドライブ」「スポーツ観戦」という活動の実施率において劣っている。

これらは生活時間の勤務時間などで、その多少が余暇活動につながっていないことと同じ結果を示すものである。

こうしたことが、今後ますます余暇の増大する傾向の中にあつて、そのまま放置されておれば、余暇を苦痛と感じ、本来的な意義はなくなるであろう。それゆえ、職場における休日管理の充実、余暇教育の充実に見出されるべきであろう。

つぎに、余暇が主要な生活時間である休日において、屋内でそれを過ごすか、屋外で過ごすかの別に、余暇活動の実施率比較を行なったが(第4表下段)、これによると、屋外で休日を過している者は6の活動で屋内において休日を過している者より実施率が高かった。

それらは、「ボウリング」「ドライブ」「読書」「映画」「音楽会・美術展」「知人・友人の訪問」であるが、これらは、レクリエーションとして、考えることのできる活動である。

先に結婚の項で触れたが、活動範囲を広げることが余暇生活の活発化に役立つ、ということが、この結果によって知ることができる。

第6表 生活時間と余暇活動との関連性

	スポーツ的活動				趣味・教養的活動			鑑賞活動			娯楽的活動			その他の余暇活動							
	ス ポ ー ツ	ボ ウ リ ン グ	ド ラ イ ブ	ゴ ル フ	読 書	絵 画 ・ 楽 器 演 奏	日 曜 大 工 ・ 工 作	習 い ご と	映 画	音 楽 会 ・ 美 術 展	ス ポ ー ツ 観 戦	演 劇 ・ 寄 席	マ ー ジ ャ ン	パ チ ン コ	競 輪 ・ 競 馬	碁 ・ 将 棋	喫 茶 店	外 で の 飲 酒	知 人 ・ 友 人 の 訪 問	買 物	マ ス コ ミ 接 触
勤務時間(8時間以上について)																					
残業(5時間以上について)																					
睡眠(8時間以上について)																					
土曜日の勤務(休日の者并休平日通)	(-)																(+)				
〃(・休日対平日通り)			(-)							(-)											
休日の過ごし方(・ほとんど外出対象に在る)		(+)	(+)		(+)				(+)	(+)									(+)		

(注) 左の生活時間項目の・印のついたものは、(+)のとき実施率が高い。

(3) 経済的条件と余暇活動

第7表に経済的条件と余暇活動との関連について示す。

収入についてみると、収入の多い方が、「ドライブ」「ボウリング」「映画」「パチンコ」「友人知人の訪問」という6活動の実施率において、収入の少ない者に劣っている。そして、「ゴルフ」「日曜大工・工作」「碁・将棋」「買物」においては高くなっている。

しかし、支出の多い者、またレジャー費の多い者についてみていくと、収入の高い者が示している各活動の関係と全く逆の形になっている。このことは、収入の多い者は、年齢層が高く、既婚者であり、それ故に、基本的項目との関連の中でみた通りの結果を収入の多い者は示すわけである。

つまり、この経済的条件の有利な者、未婚者で年齢層の下位に属する者が、活動範囲の広い、活発な活動を行なっている、といえる。そして、収入が多くても、個人支出や、それに占めるレジャー費の額が小さい既婚者・高年齢層は、経済的条件に左右されて活発な活動をしていない、といえる。

こうした、経済的条件の影響を小さくするには、低料金の公共施設の設置にその解決の途を見出すべきであろう。また、このように経済的条件に大きく余暇活動が影響されるという現象は、自然的環境の少なくなっている大都市においては、今後、ますます進行していくであろう。

(4) 生活と余暇に関する意識と余暇活動

第8表に生活と余暇に関する意識と余暇活動との関連について示す。

余暇観についてみると、余暇を「楽しみ・新しい経験のため」に過ごしている、とする者と、余暇を「仕事の疲労回復のため」「ただ漫然と」過ごしている者との間では、「経験・楽しみ」とする者の方が、「ボウリング」「音楽会」「買物」の実施率において、高くなっており、逆に、「ドライブ」「マージャン」において、実施率は低くなっている。「楽しみ・経験」と「漫然と」との間では、「楽しみ・経験」として余暇を過ごしている者の方が、「読書」の実施率が高く、逆に「マージャン」の実施率が低くなっている。しかし、「楽しみ・経験」と「疲労回復」のためとする者の間では、「ボウリング」「音楽会・美術展」「買物」において、「楽しみ・経験」とする者の実施率が高くなっているだけで、「マージャン」には関連がない。

このことは、漫然と余暇を過ごしている者が、「マージャン」をそれだけ多くしていることとなる。「マージャン」という、射的的活動の実施は、決して余暇それ自体を積極的に意義づけようとするには至らない。

また、「疲労回復」のために余暇を過ごすものは、娯楽的活動群に属する活動もしないが、積極的な活動の実施も低調であることがわかる。

つぎに、余暇指向と収入指向との関係を見てい

第7表 経済的条件と余暇活動との関連性

	スポーツ的活動				趣味・教養的活動				鑑賞活動			娯楽的活動				その他の余暇活動					
	スポーツをする	ボウリング	ドライブ	ゴルフ	読書	絵画・楽器演奏	日曜大工・工作	習いごと	映画	音楽会・美術展	スポーツ観戦	演劇・寄席	マージャン	パチンコ	競輪・競馬	碁・将棋	喫茶店	外での飲酒	友人・知人訪問	買物	マスコミ接触
収入(4.5万円以上)	(-)	(-)		(+)			(+)		(-)				(-)		(+)				(-)	(+)	
支出(1.5万円以上)		(+)		(-)			(-)		(+)					(+)	(-)	(+)					
レジャー費(0.5万円以上)		(+)					(-)		(+)					(+)	(-)	(+)	(+)			(-)	

く。余暇を収入より希望する余暇指向型は、その逆の収入指向型よりも、「音楽会・美術展」に高い実施率を示し、「競輪・競馬」においては低い実施率を示している。この活動傾向の差異は、そのまま余暇に対する評価の違いとなっている。

生活満足度指数の内的項目で、「スポーツ」の実施率に関係しているのは「余暇生活全般」に対する評価である。ここで、「同僚との関係」に、非常によく満足している者が、そうでないものよりも、「マージャン」の実施率が高くなっていることに注意しなければならない。対人関係の良さが、こうした活動に結びついていることは、それだけ、活発な余暇活動を主体とする、集団の発生が非常に少ないということを示している。

この内的項目に満足度の高い者は、スポーツ的活動、趣味・教養的活動、鑑賞活動のそれぞれに、ほとんど(+)の関係を示している。

つぎに、外的項目についてみると、まず、給料という経済的条件に満足度の高い者は、低いものに対して、「パチンコ」の実施率が低くなっている。このことは、先の「収入指向」型の者に「競輪・競馬」をする者の比率が高かったことと、同じ傾向である。つまり、給料に対する満足度の低いもの、および、余暇よりも収入を指向するものが、こうして「競輪・競馬」「パチンコ」にそれぞれ活動の場を求めることは、経済的条件の不利な者が活発な余暇活動へと向かうことの可能性の小さいことを示すものである。

勤務時間に対する満足度の差が、「碁・将棋」「喫茶店」についてのみ関連をもつということは、生活時間の項で述べたと同様に、それが余暇活動の内容的充実と関連がうすいことを示している。

これら、内的満足度の合計と外的満足度の合計、およびそれらの合計と、余暇活動との関連を見ていこう。

「スポーツ」との関連で、外的満足度合計が、正の相関を有しており、内的満足度の合計にそれがないのは、「スポーツ」の実施が環境的な、また施設的な側面と大きな相関をもっているという

ことである。これらの指数の合計は、年令との相関を持つので(内的=0.12, 外的=0.12, 全体=0.11, N=471)「ゴルフ」に正の相関、「映画」に負の相関をもっている。

しかし、娯楽的活動、その他の余暇活動群に属するものと、負の相関をもっていることは、注目すべきである。

ここで、この節をまとめると、余暇活動の経験の必要性が、重要な課題となってくることである。

余暇観の、「疲労回復」「漫然と」という意識で余暇を過ごしている者に対し、また、余暇よりも収入を希望する者、給料に不満をもっている者に対して、十分な余暇教育により、経験を与え、新しい別の活動形態を生み出す契機を与えていくことが重要である。

5. 余暇活動成立の要因

(1) スポーツ的活動

スポーツ的活動の中で、「スポーツをする」についてみると、未婚者、低収入という共通的な要因および生活と余暇に関する意識の中で「余暇活動全般」「外的(環境的)条件」への満足度が高いこと、がその実施率に大きな影響を与えている。

土曜日の勤務において、「半日勤務」「平日通り」の者の方が、「休日」「隔週休日」の者より「スポーツ」の実施率が高くなっているが、これは「スポーツ」をする要因をなしているというより、むしろ、わが国の社会人において余暇を積極的に利用していく態度に欠けていることを示すものである。

「ボウリング」は、低年令層、未婚、低収入、高支出(レジャー費を含めて)の者に多くなされるものだが、一方「ゴルフ」は逆に、高年令層、既婚、高収入、低支出の者に多くなされ、両者は対称的である。しかし、「ゴルフ」には生活と余暇に関する意識において、全般的に高い値を示す者が多い。つまり「将来性(自己および会社)」「同僚との関係」「生活全般」「給料」「職場の環境」「外的条件」「内的条件」「全体的条件」

第8表 生活と余暇に関する意識と余暇活動との関連表

		スポーツ的活動					趣味・教育的活動				鑑賞活動			娯楽的活動				その他の余暇活動				
		スポーツをする	ボウリング	ドローン	ゴルフ	読書	絵画・楽器演奏	日曜大工・工作	習いごと	映画	音楽会・美術展	スポーツ観戦	演劇・寄席	マージャン	パチンコ	競輪・競馬	碁・将棋	喫茶店	外での飲酒	知人・友人の訪問	買い物	マスコミ接触
余暇観	・楽しみ・経験—疲労回復と漫然と	(+)	(-)							(+)			(-)								(+)	
	・楽しみ・経験—漫然と					(+)							(-)									
	・楽しみ・経験—疲労回復	(+)								(+)											(+)	
・余暇指向 — 収入指向										(+)					(-)							
生活満足度5段階評定尺度	内的	会社の将来性	(-)		(+)																	
		自己の将来性				(+)	(+)															
		上司との関係																				
		同僚との関係				(+)	(+)							(+)								
		余暇生活全般	(+)	(+)	(+)		(+)				(+)											
		生活全般				(+)	(+)					(+)										
	外的	給料				(+)									(-)							
		仕事の内容					(+)												(-)			
		勤務時間															(+)	(-)				
		職場の環境	(-)		(+)					(-)										(-)		
		職場のレクリエーション施設					(+)			(-)				(-)								
		食堂・社宅・その他								(-)				(-)				(-)			(-)	
内的満足度指数計					(+)				(-)													
外的満足度指数計		(+)			(+)				(-)			(-)						(-)	(-)			
全満足度指数計					(+)				(-)										(-)			

(注) 左の項目の・印に属する者は(+)のとき、実施率が高い。満足度については高いものについて(+)のとき、実施率が高い。

のそれぞれに高い満足度を示しており、全体的に保守的（安定的）な傾向を示す傾向の者に、「ゴルフ」はよくなされている。

「ボウリング」「ゴルフ」はそれぞれ年令的な要因が働いているといえよう。

「ドライブ」はとくに勤務時間などと関連を有すると思われるが、これも「スポーツをする」と同じく、土曜日の勤務が「平日通り」とする者の方が「休日」とするものより多くなっている。

(2) 趣味・教養的活動

後に述べるように「マスコミ接触」の実施率は非常に高いが、各特性との間の関連は一つとしてみられない。これに対して「読書」はこれも実施率が非常に高いが、多くの特性と関連性を有している。

とくに生活と余暇に関する意識の項とのつながりが多くなっている。「自己の将来性」「同僚との関係」「生活全般」「仕事の内容」「職場レクリエーション施設」「内的条件（合計）」「外的条件（合計）」「全体的条件」のそれぞれに高い満足度を示す者の方が実施率が高くなっているのであるが、年令・結婚との間には関係はみられない。「読書」は全体的に生活に満足を示す者に特徴的な活動であるといえよう。

また「絵画・楽器の演奏」の実施率の高いものは「余暇生活全般」に高い満足度を示しており、その因果関係は別として、絵画・楽器演奏のもつ余暇活動の内容をよく示している。

「日曜大工・工作」は、「ゴルフ」、後に述べる「碁・将棋」とよく似かよっており、高年令層、既婚、高収入、低支出の者に多くなっている。

「習いごと」は実施率そのものが非常に小さく、また個人的必要に迫られて何かを「習う」ということが多いためであろうか各特性との間に関連は認められない。

(3) 鑑賞活動

「映画」は低年令層、未婚、低収入、高支出の者に多く、また多くの生活と余暇に関する意識の項で低い満足度を示す者に多い活動である。とくに

「外的条件（合計）」「内的条件（合計）」「全体的条件」の3項目に不満を示す層の多いのは、「ゴルフ」と対称的である。

「音楽会・美術展」では、未婚の者が多くなっている。そして余暇を「楽しみ」としてすごしており、収入よりも余暇を指向し、「生活全般」に高い満足度を示す層に多い。余暇を楽しむ態度で過ごしている層といえよう。

また「スポーツ観戦」は、生活と余暇に関する意識の「生活全般」に高い満足度を示す者、に多くなっている。

「演劇・寄席」については、どの特性とも関連を認められなかった。

(4) 娯楽的活動

娯楽的活動の中の「マーじゃん」「パチンコ」「競輪・競馬」は、余暇活動、とくにレクリエーションとして望ましい部類に入るものではない。これらは他の余暇活動にとって代られるべき性格のものである。ゆえにこれらの活動について、それらを実施する対象に特徴的な特性は、マイナスの意味をもつものとして扱わなければならない。

「マーじゃん」と「パチンコ」をよく実施する対象についてみていくと、「生活と余暇に関する意識」で共通して不満を示している。つまり「マーじゃん」では、「外的条件（合計）」、「パチンコ」では「給料」「レクリエーション施設」「食堂・社宅」など、外的条件の個々の項目に不満を示している。こうした自己をとりまく環境的条件に対する不満が「マーじゃん」「パチンコ」の実施率を高めているのであれば、外的な条件であるだけにそれに対する対策も比較的具体化して考えていくことができる。

また「マーじゃん」では、余暇を「疲労回復のため」「まんぜんと」すごしている者の方が実施率が高くなっていることが特徴的である。

「競輪・競馬」は、収入の少ないもの、生活の中で、余暇よりも収入を指向する者に多くなっている。

「碁・将棋」は、上の3つの活動とは質的に異

なって来る。この活動についていえることは、高年令層、既婚、高収入、低支出と高年令層に多くなされることであり、「ゴルフ」「日曜大工」と同じ傾向を示している。

(5) その他の余暇活動

趣味・教養的活動の実施率の高い者は、いずれも生活と余暇に関する意識において高い満足度を示したが、「喫茶店」「飲酒」については不満層が高い実施率を示している。この2活動は、支出額が高い者に多くなされており、これが年令という要因より比重が大きくなっている。

「訪問」は、未婚者、休日に外出を多くし、収入の低い者に多く、活動性（家庭的な束縛のないこと）が大きな要因となっている。

「買物」は収入が多く、支出の少ない者、余暇を「楽しみ・新しい経験」として過ごしている者となる。

「マスコミ」については、どの特性とも関連をもたず、このことは現代社会の中で、新聞・ラジオ・テレビはもはや生活の一部として定着しており、こういった特性をもつ者にとってもその

傾向があることを示している。

VI. ま と め

1. 余暇活動（レクリエーション活動）が消極的な内容となる要因として、結婚という条件がある。結婚によって家庭指向的（あるいは無為的）な余暇活動傾向となる。

2. 生活時間の構造はほとんど余暇の内容を規定するまでには至っていない。余暇の存在ないし増大が、それと対応する余暇活動の内容的充実を伴っていないといえる。

3. 支出額の多い層が余暇活動に比較的活発な結果を示している。

4. 環境（レクリエーション施設）に高い満足度を示す者は、積極的な余暇活動を実施する傾向にある。

参 考 文 献

- 1) 総理府青少年局：青少年の余暇利用に関する研究，青少年問題研究調査報告書，41-5，P.65，1967
- 2) 清水幾太郎：余暇時代と人間，潮出版社1969
- 3) 安田三郎：社会統計学，丸善株式会社，P.187~189，1969
- 4) 糸野豊，竹之下休蔵，日比野朔郎，牧野澄子：年令と性の角度からみたスポーツ人口の構造について，体育学研究，8(1) P.24 6，1963
- 5) 中西尚道：日本人の生活時間の変化—昭和16年調査と昭和35年調査の比較，NHK放送文化研究所年報，8，1961
- 6) 東京大学新聞研究所：東京都民の生活時間と生活意識，東京大学新聞研究所紀要，10(2)，1960
- 7) 労働省婦人少年局：生活時間白書—婦人のレジャータイムのための研究1961
- 8) 江橋慎四郎，浅田隆夫：職場のレクリエーションとその効果に関する研究，総理府青少年対策本部資料44，P.161~164，1970
- 9) Havighurst, R.J.: Leisure and Life Style, American Journal of Sociology, 65, P.396~404, 1959
- 10) 水野忠文，影山健：わが国におけるスポーツに関する世論調査の分析的研究，体育学研究，9(1)，P.342，1964

- 11) 団琢磨, 三好喬: 米子市を中心としてみた農村の余暇とレクリエーションについて, 体育学研究, 8(1), P. 257, 1963
- 12) 総理府青少年局: 職場におけるレクリエーションの実態に関する調査, P. 1~15, 資料 42(3), 1967
- 13) 片岡暁夫: 農村(近郊)勤労青年の余暇生活について, 体育学研究, 6(1), P. 41, 1961
- 14) 山本実: 社会人のレクリエーションの実態, 体育学研究, 2, P. 183~184, 1957
- 15) 武笠康雄, 近藤衛, 斎藤定雄: 学歴, 職業とスポーツ参与について, 体育学研究, 8(1), P. 247, 1963
- 16) 日本社会構造調査会: ホワイトカラーの意識構造, P. 88, 1962
- 17) 江橋慎一郎, 高萩盾男: 勤労青少年の野外活動の実態に関する調査研究, 体育学研究, 13(5), P. 65, 1968
- 18) 生田清衛門, 森田喜次郎, 石橋保: 家族レクリエーションの実態とその問題点, 体育学研究, 11(1), P. 82, 1966
- 19) NHK放送文化研究所: 生活意識調査から, NHK文研月報, 15(2), P. 24~26, 1967
- 20) Anderson, N: Work and Leisure, London, P. 34, 1961
- 21) White, R.C.: Social class differences in the uses of leisure, American Journal of Sociology, 61, P. 255, 1955
- 22) 江橋慎一郎, 池田勝: レクリエーション意識に関する研究—小山市住民のレクリエーション意識について, 体育学研究, 6(1), P. 81, 1961
- 23) 浅田隆夫: レクリエーション意識に関する研究, 東京教育大学体育学部紀要, 2, P. 1~25, 1961
- 24) Donald, M.N.: The Meaning of Leisure, Social forces, 37(4), PP. 355~360, 1959
- 25) 池田勝: 余暇行動における職業的地位, 役割因子の分析, レクリエーション研究, 4 PP. 153~162, 1968
- 26) Bishop, D.W.: Some Multivariate Data Analysis Techniques and Their Applications to Recreation Research, Recreation Research, American Association for Health, Physical, and Recreation. P. 183, 1966
- 27) Bishop, op. cit, PP. 177~178
- 28) 鮑戸弘: 投原行動の研究, 年報社会心理学 5, PP. 246~247, 1964
- 29) 林知己夫, 林山孝喜: 市場調査の調面と実際, 日刊工業新聞社, 1969
- 30) 国民生活研究所: 日本人の生活意識, 至誠堂, P. 200~208, 1970
- 31) 経済企画庁調査局: 独身勤労者の消費生活(第6回), P. 6~7, 1969
- 32) 同上, PP. 58~61